



【蓮】 絵・文：白澤 恵舟

白紅色の掌は御仏のご座所。夏の暑熱にもめげず、優雅な姿を水面に映しながら微風に揺れる。そのとき、人は、ひとときの安堵に包まれる。

人にやさしい まちづくり探検隊

会長 菅原 三朗

高齢になっても、障害があっても、みんな同じように行動し社会に参加出来るようにするためには、まち・社会・制度・人の心にあるさまざまなバリア（障壁）をなくし、どんな人にとっても快適で便利なまちづくり、みんなが同じように暮らせるまちづくりを進めていく必要があります。みんなでバリアフリーのまちづくりについて、学んでみませんか。夏休みの中の一日を、思いやり・助け合いの心を学ぶ貴重な機会に参加しましょう！

これは潟上市社会福祉協議会が、市内に住む小学校5・6年生を対象に福祉教育の一環として、関係機関

団体のご協力のもとに毎年継続実施している、バリアフリーのまちづくりをめざした「ひとにやさしいまちづくり探検隊」事業の隊員募集の呼びかけである。

今年は市内の飯田川小・大久保小の5・6年生30名が参加して、7月31日実施された。メイン会場は天王グリーンランドに隣接の屋内ゲートボール場「スパーク天王」で、買物体験は約700mはなれた「マックスバリュ天王店」である。当日の参加者は、小学5・6年生30名をはじめ、県車いす連合会の会員6名、市内ボランティア5名、保健師2名それに社協職員12名の総勢55名で実施された。午前中は県車いす連合会の方々の指導により、車いすの構造や基本操作、介助方法、段差の上り下りや溝越え、車いすバスケットボールなどについての学習とレクリエーションを行った。

午後は会場から国道101号を700m離れている「マックスバリュ天王店」で車いすでの買物体験である。児童5人に車いす連合会員1名で1つの班とし、基本的には小学生に考えてもらい自走することになるので、本当に危険なとき以外は手出し口出しはしない。歩道走行時の見守りは自分が車道側に立つようにする。児童には1人300円の小遣が支給され、車いすに乗ったままで買物を体験する、持ち時間は1人20分である。

終了後会場に戻り次第各個人のまとめ及び各班の意見のまとめをおこない、みんなでディスカッションをし、学習のしおりを完成させる。

車いすを利用しているのはどんな人？まちに出て困ることは？私にできることはあるのかな？など、この体験と学習と車いす生活者との交流を通して分かったことは、子供達の貴重な体験になったことと思います。

＝建設業関係功労国土交通大臣表彰＝

村木通良・佐藤清忠両氏が受賞

役員として業界発展に貢献

国土交通省は、7月9日、平成19年建設事業関係功労国土交通大臣表彰を発表した。

本会員の村木通良常務理事（鹿角支部・村木組）、佐藤清忠理事（北秋田支部・佐藤建設）が、多年に建設業に精励するとともに、役員として業界の発展に多大な貢献をしている功績が評価され、国土交通大臣表彰の栄誉に輝いた。

このたびの受賞者は、268名、5団体。7月10日、国土交通省10階共用大

会議室において式典が行われ、冬柴国土交通大臣より、表彰状の授与が行われた。



村木通良常務理事



佐藤清忠理事

フォーラム

東北は訴える！

ーインフラ整備これでいいのかー

地域の活力なくして国の活力なし



「東北の社会資本整備を考える会」は、仙台市で「フォーラム東北は訴える！ーインフラ整備これでいいのかー」を開催した。約1300人が集まる中、基調講演や意見発表などを通して社会基盤整備の必要性を強くアピールした。

開会にあたり、主催者を代表して(社)東北経済連合会幕田会長が「高速交通体系の整備が全国の他地域に比べ遅れている。東北の自立、発展のため一日も早くネットワーク化を図ってほしい。」と要望するとともに「地域の活力なくして国の活力なし。東北への重点配分が実現されるよう、総意を結集していただきたい。」とあいさつ。

続いて、来賓として出席した国土交通省谷口技監は「英国、米国、中国、韓国などでは、国際競争のため公共事業費を増やしている。我国も削減するだけという風潮を変え、国家100年の大計の中で、どんな負担

が良いのか議論していく必要がある。」と延べた。

次に、武蔵工業大学の中村英夫学長が「国土形成計画と東北の社会資本整備」をテーマに基調講演を行った。この中で「日本の工業製品は性能の良さ、高い信頼性、美しいデザインからジャパンプラントと呼ばれている。国土や社会資本整備においてもジャパンプラントと呼べるような質の向上を目指す時期に来ている。」と語った。

その後、青森県の石澤照代さん（津軽・花詠みの宿 花禅の庄 女将）が「青森のすばらしさを発信します」、秋田県の佐藤京子さん（乳頭温泉郷 妙の湯・夏瀬温泉 都わすれ 女将）が「観光地に対しての道路とは」をテーマにそれぞれ意見発表した。秋田県からの発表者である佐藤さんは「人間の体に例えると高速道路は動脈、地域の道路は毛細血管である。末端まで血液が流れるよう整備を進めてほしい。」と訴えた。



佐藤京子氏

終わりに、宮城県商工会議所連合会の佐藤晃郎副会長が8項目に上る提言を採択し、国や関係機関に要望していくことを了承した。

＝社会貢献活動推進月間中央行事＝

(株)寒風、むつみ造園土木(株)が功労者表彰

住みやすいまちづくりへ努力

(社)全国建設業協会（前田靖治会長）は7月27日、東京・大手町の経団連会館で建設業社会貢献活動推進月間中央行事を開催、功労者表彰、事例発表、記念講演を行った。

本会員の(株)寒風、むつみ造園土木(株)が、建設業ふれあい活動の評価項目において功労者表彰を受賞した。

開会にあたり前田会長は「われわれ建設業を取り巻く環境は依然として大変厳しい状況が続いているが、それにも拘らず、全建、都道府県建設業協会、会員企業は、それぞれのまちに暮らす一員として、だれもが住みやすいまちづくりに努力を重ねるとともに、さまざまな社会貢献活動を行っている」とあいさつした。

表彰は38協会・支部、会員企業32社が災害復旧、建設業ふれあい、防災支援、環境美化、社会福祉活動、イメージアップなどの評価項目別に、前田会長が表彰状を手渡し、業績を称えた。また、活動事例では鳳輪建設業協会、熊本県建設業教会建築部会、愛媛県建設業協会女性部会が発表した。

記念講演では、堀田力(財)さわやか福祉財団理事長が「建設業における社会貢献活動とコンプライアンス」について講演した。



人材確保・育成推進懇談会を開催 業界、教育現場が一体となり対策を県へアピール

県協会では、平成19年6月26日（火）秋田ビューホテルにおいて、人材確保・育成推進懇談会を開催した。

懇談会には県立工業高校の建設関連学科担当教諭や、国、県を含めた人材協委員ら20名が出席。

初めに、人材確保・育成推進協議会委員長代理の社団法人秋田県建設業協会八重樫経営委員長が、「地元、鹿角の求人倍率は0.55となっており、平成12年度を100とすると公共事業が50%を切る状況で、経営者としても今後どうなるか判断しかねている。景気のいい時より建設業の受容性が切実に高まっていると思う。秋田県民に建設業の必要性をアピールするために、高校の先生と共同で頑張っていかなければならない」とあいさつ。

会議では次の事項を協議した。

1. 平成19年度新規学卒者採用状況について
2. 平成19年度新規学卒者学校別及び研修会アンケートについて
3. 平成20年3月高校別卒業予定者進路希望状況について
4. 最近の雇用情勢と18年度就職に関するスケジュールについて
5. 平成19年度高校生の現場見学会及びインターンシップの実施について

意見交換

◎人材協委員側から

- ・県内企業としては優秀な人材がどんどん外に出ていってしまうのが残念であるが、受注額の減少等により求人は非常に厳しい状況にある。
- ・新規採用した場合、即戦力にならないというのも新規採用しない理由の一つとなっている。就学中の資格取得等、アピールできる生徒を育ててほしい。
- ・年配の人にも辞めてもらわなければ経営が苦しいのが現状、新規学卒の採用について学校側の話を聞いて希望に添えないことが非常に心苦しい。
- ・インターンシップの実施現場、時間がなく希望に添えず協力できないジレンマがある。

◎学校側から

- ・生徒達は地元就職を望んでいるが県内企業からの求人が少ない。県外もしくは他産業へ流れている。
- ・資格取得やインターンシップに力を入れても、卒業しても建設関係への就職先がないという諦めがあり取組む姿勢も低くなっている。進路の目的、希望を持たせられないのが心苦しい。
- ・現場見学会、インターンシップでさえ建築関係の受け入れがない。在学中の現場見学会、インターンシップで土木建築への興味を持つ生徒が多く、その芽をつぶさないようにしたい。
- ・施工管理試験を受けさせるにあたり、県外で行われるため、交通費等費用がかかり大変になっている。
- ・関東周辺で1年間研修をやって育ててくれる企業があるので、一度県外に出て経験を積んで県内に戻ることも薦めている。
- ・もともと県内の建設関係へ進みたいと意欲のある生徒が入ってきて、進路に関する面接で県内就職が無理だと県内への就職することを選び、建設関係の就職を諦めてしまうのが残念である。受け入れのベースを作りたい。

◎行政側から

- ・資料の数字を見てこれほどひどい数字かと驚いている。県内就職について県でも一度県外へ出た生徒（人）が秋田への思いを胸に戻ってこれる環境作り、受け入れ先を整備することが大切。県として努力しなければならないことを切実に感じた。

土木 建築の

近代化 遺産

No.60

旧秋田魁新報社

秋田市大町一丁目2-6



場所だけは変わっていないが在りし日の新聞社がここにあった。

秋田の近代化遺産として、現在その形態はとどめていないが、秋田の文化の発信地であった秋田魁新報社の社屋を取り上げた。正面入口のファサードなど懐かしさを感じる人も多いと思うが、現在の新しい建物の前にある新聞の掲示板が唯一その名残を感じさせる。

秋田県の代表的な新聞である秋田魁新報の前身は明治七年（一八七四）に創刊された遐邇（かじ）新聞である。その後、明治十一年（一八七八）に秋田遐邇新聞、同一五年には秋田日報と改題された。当初は政治的な色合いが強く、野党的立場を明確にしたため厳しい弾圧を受け休刊、発行停止などに追い込まれた。

その後は、明治二〇年（一八八七）、東京専門学校（現早稲田大学）を卒業した井上広居を主筆に招いて秋田町茶町菊之丁の秋田日報社から秋田新報として復刊し、再び県当局と対立を繰り返して発行停止となったが、明治憲法が公布された同二二年（一八八九）に秋田魁新報

が創刊されている。

大町一丁目にあった旧社屋は昭和五年（一九三〇）に清水組（現清水建設）の設計、施工によって建設されたものである。この建物はRC造り、三階建て、平らな陸屋根方式で、鉄筋コンクリート構造の建築物としては県内でもかなり早いほうであった。社屋の目新しい特長は、入口部分のファサードで、表現主義的な装飾を加味し、見方によっては国際主義建築に移行する過渡期の様式を示したものであった。内部の社長室や第一、第二応接室、それに階段に洋式建築風の贅沢な意匠が施されていた。

現在、当時の新聞社の面影はまったく見えないが、県内における近代化建築の先達を見るのにもったいなく、小ぎれいな現代ビルを思わせるような秋田の精神風土を象徴するものの一つではないかというのが正直な感想である。

（取材・構成／藤原優太郎）

賢治の山を旅する

藤原 優太郎

「ああ、ここは五輪の塔があるために五輪峠といふんだな／ぼくはまた峠がみんなで五つあって／地輪峠水輪峠空輪峠といふのだろうと／たったいままで思ってた…」

宮沢賢治が岩手県江刺市と遠野市の境にある五輪峠に立ったときの情景を作品『春と修羅』第2集の中に残している。ふるさと花巻からも近いこの山道は昔、遠野街道と人首（ひとかべ）街道の接点で、盛岡藩と仙台藩の領界となっていた。

五輪の塔は戦国の世、相戦った武将たちの戦場となり、そこで戦死した者の供養塔が大きな五輪の塔となって残されている。この塔は、仏教世界という宇宙万物の構成要素を表わすものといい、基部から方形、円形、三角、半月、宝珠の石が重なり、それぞれ地、水、火、風、空を意味している。形の異なる石がみんな自己主張しているようだ。

この五輪峠の江刺市側の麓に人首という古くからの街道に沿った人首の錆びた街並が延びている。…丘のはざまのいっぽん町は／あさましまで光ってる／そのうしろにはのっそり白い五輪峠…まるで滅びの美学を感じさせるような、賢治のいうようにあさましまでの輝きがそこにあった。人首という怪しげな地名もやはり戦国の名残りなのだろうか。非常に興味を抱かせる宿場町である。

水沢市と大船渡を結んだのが盛街道である。人首はこの主街道と並行する脇道のようなとこ



ろだが、賢治の足跡を訪ねるにはこの道をたどるしかない。なぜならこの先にいくつも謎めいた村々が連なっているからだ。

木細工という細長い集落に入った。ここに廃校になった小さな学校がある。石の校門に「木細工中学校」の文字が見えるが、小学校も一緒だったらしい。手を加える風もなく今にも崩れ落ちそうな小さな木造校舎は私たち年代の郷愁を誘ってやまない。そこには不思議な風情が漂っている。タイムスリップしたようなひと昔前の世界は、賢治の代表的作品『風の又三郎』を彷彿させる。事実、昭和32年、ここが風の又三郎の映画のロケ地となったという。床が抜け落ちそうな廊下を渡って校舎の中に入ってみた。教室には古い木製の机が三つ四つ乱雑に置かれ、黒板に「高田三郎」と「モリブデン」というきれいな文字が書かれていた。誰か賢治の熱心なファンのなせる仕業かと思われたが、高田三郎は又三郎の本名、モリブデンはこのあたりに地質調査に来た賢治の文章にもある。教室の天井は木細工の名に恥じない見事な方形の板が並んでいた。ここにもまた、人首街道のような鈍い滅びの光彩があった。

秋田からの日帰り旅はこの先、姥石峠の高台にある種山ヶ原を訪れることになる。道中のバス停にある火石や古歌葉などという地名は人首同様、非常に珍しい。道の駅がある姥石から種山ヶ原の牧野に分け入った。この日はあいにくの小雨模様で、広々した緑の牧野は濃い霧に閉ざされていた。奇しくも賢治がこの種山ヶ原に来た時と同じ濃霧の光景があたり一面に広がっていた。…溶け残ったパラフィンの霧が底によどんでいた…種山ヶ原の雲の中で刈った草は、どごさ置いたが忘れだ、雨あ降り…同じような状況でもそんな思いもつかない描写をする詩人の賢治はさすがにすごいと思った。賢治の思想の原点は水や光や風ぜんたいがわたくしなのだという宇宙的世界観にある。まさに五輪の塔そのものの仏教哲学ではないかと思った。

宮沢賢治に関わる岩手の山は、このほかに岩手山や早池峰山、鞍掛山、七時雨山など各地にある。偉大な詩人の心象風景を訪ねる旅はなぜか心地のいい匂いが漂っている。だからこんな旅がやめられない。